編集後記

敬心・研究ジャーナル第４巻第２号（通巻第８号）をお届けします。今回の巻頭は、長らくレクリエーション研究や、生活文化、福祉文化研究に携わってこられた薗田碩哉先生に、コロナ禍での生活変容について執筆をお願いしました。お忙しい中を、生活の様々な側面からコロナの影響を分析した、興味深い評論をいただき、感謝です。

投稿論文も、査読論文が２件、実践記録が２件、研究ノートが８件と、全部で12件の職業教育研究開発センター研究員の皆様を中心に投稿がありました。敬心学園傘下の学校教員からの投稿が今回も少なかったのは残念ですが、半年ごとに通巻８巻目で毎回10本以上の投稿を掲載されているのは、研究誌としてまあまあなのではないかと、弱小学会の会長歴もあり研究誌の編集には苦労をして来た編集委員長としては少し胸をなでおろしています。特に今号の執筆期間はコロナ禍の真最中で、教育関係者は対面授業から Web 授業への切り替えの真最中で、とても論文執筆どころではないという中で研究を推進し、論文化していくのはとても素晴らしい努力だと思います。

同時に、こういう状況下でも、きちんと Web 公開を前提とした責任のある研究誌として発行されて行けるのは、編集スタッフの裏方さんがしっかりしているからでもあります。まとまってしまえば、１冊のある意味でこのテーマの研究者の興味関心に対応した資料でしかないかもしれませんが、研究誌として発行していくには、査読をはじめ様々な細かな配慮が必要です。これらをきちんと一つ一つこなして行けている、編集スタッフに改めて敬意を表したいと思います。

今後、保健福祉系の対人援助に関わる職業教育に関する研究に関しては、コロナ禍の影響で対人接触が困難になる中、難しい課題を抱え込むことになるでしょう。しかし、同時にコロナは人々の暮らし、特に人間関係に多くの新たな課題を突きつける形になっており、実践的問題解決を目指す職業教育が抱える課題もとても多くなっています。これらを対象とした研究開発の課題は多く、より多くの皆さんによる人々の生活問題の解決に寄与する様々な研究と開発が期待されます。

なお、別項にありますように、本誌第３巻第２号に掲載された論文に関しての問い合わせが編集担当に届いています。基本的には、研究や論文発表の自由があるとしても、明らかな立証ミス等がある場合には、掲載誌としても然るべき対応が必要でしょう。今回は、執筆者からのご連絡がありませんし、又、対応に関しては慎重に検討する必要があるため、この対応に関しては次号で編集委員会としての見解を明らかにしたいと考えています。

本誌の編集に関しても、読書の皆さんのご意見をいただければ幸いです。

（⇒　vetrdi-kensyu@keishin-guroup.jp）

（編集委員長　川廷　宗之）

コロナ禍による緊急事態宣言・措置がとけた後も、今号はなかなかエントリーをいただけず、今号のご投稿は厳しい状況なのかと案じておりましたが、前号発行を終えて間もなく最初のエントリーをいただき、その後は次々とエントリー・ご投稿をいただくことができました。コロナ禍中のこれまでとは異なる新たな様式へのご対応をされる執筆者の先生方に加え、編集委員や査読委員の先生方にお力添えをいただき、結果13本の掲載をすることができ、事務局として大変嬉しく思っています。ただし、執筆を進めたがコロナ禍の影響を受け研究が進まない、図書館での調べが思うようにいかず、不十分なままには執筆・掲載ができない、といった声もいただき、少なからずの掲載影響があったこともお伝えいたします。

With コロナがこれからも続いてしまい、コミュニケーションの質や量、手法などの変化が余儀なくされ、ワークライフバランスも変もわりつつあります。ご自身や周囲、社会の変化の中で、研究をされる皆さまのその研究発表の場として、弊ジャーナルを活用いただけると幸いです。ご投稿をお待ちしております。

（編集事務局担当　杉山　真理）

―「敬心・研究ジャーナル」査読委員一覧（50音順：敬称略）（2020. 12. 1現在）―

阿久津　摂	安部　高太朗	天野　陽介	伊藤　正裕	稲垣　元	井上　修一
上野　昂志	大川井　宏明	大谷　修	大谷　裕子	岡﨑　直人	小川　全夫
奥田　久幸	小関　康平	川廷　宗之	菊地　克彦	木下　美聡	近藤　卓
坂野　憲司	佐々木　清子	佐々木　由恵	島津　淳	白川　耕一	白澤　政和
杉野　聖子	鈴木　八重子	高塚　雄介	武井　圭一	東郷　結香	永嶋　昌樹
中西　和子	西村　圭司	橋本　正樹	浜田　智哉	原　葉子	町田　志樹
松永　繁	丸山　晋	水引　貴子	宮嶋　淳	八城　薫	安岡　高志
行成　裕一郎	吉田　志保	吉田　直哉	渡邊　眞理		

―「敬心・研究ジャーナル」学校法人敬心学園　編集委員会（2020. 12. 1現在）―

委 員 長　川廷　宗之　（職業教育研究開発センター、大妻女子大学名誉教授）

委　　員　小泉　浩一、黒木　豊域（日本福祉教育専門学校）

塩澤　和人、阿部　英人（日本リハビリテーション専門学校）

中村　泰規、浜田　智哉（臨床福祉専門学校）

木下　美聡、天野　陽介（日本医学柔整鍼灸専門学校）

水引　貴子　（日本児童教育専門学校）

有本　邦洋　（東京保健医療専門職大学）

事 務 局　杉山　真理、藤井　日向（職業教育研究開発センター）

〈執筆者連絡先一覧〉

コロナ禍が示唆する新しい生活と社会
— 既存の枠組みからいかにして脱出するか —
法政大学大原社会問題研究所　薗田　碩哉
E-mail：s.sonoda@nifty.com

小川博久の保育方法論における非-援助論
— 保育者のまなざしの二つのモード —
郡山女子大学短期大学部　安部　高太朗
〒963-8503　福島県郡山市開成3-25-2
E-mail：hkkateiron@gmail.com

ドイツにおける職業教育の動向
— コンピテンスと資格枠組みに着目して —
新潟医療福祉大学　杵渕　洋美
〒950-3198　新潟県新潟市北区島見町1398番地
新潟医療福祉大学　健康科学部 健康スポーツ学科
E-mail：kinebuchi@nuhw.ac.jp

PDCA サイクル研修で変わった改善意識
北海道福祉教育専門学校　髙山　晃作
〒051-0004　室蘭市母恋北町1丁目5-11
E-mail：kodomo2@hokuto-bunka.ac.jp

福祉事務所におけるソーシャルワーカーを人員配置するための考察　その①
— ソーシャルワーカーの費用対効果を算出する試みを通して —
九州保健福祉大学大学院連合社会福祉学研究科博士（後期）課程　橋本　夏実
E-mail：hashimoto.natsumi.0305@gmail.com

幼稚園教育要領・保育所保育指針等の「10の姿」はどう語られているか
— 一般向け解説書における解釈の雑多性 —
大阪府立大学　吉田　直哉
〒599-8531　堺市中区学園町1-1　大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類
E-mail：naoya_liberty@yahoo.co.jp

1951年刊行『街娼についての調査』の骨子
— 北海道の取組例が知れる原資料 —
日本社会事業大学 社会福祉学部　梶原　洋生
〒204-8555　東京都清瀬市竹丘3-1-30

日本における女性の自立の源泉
— 吉田松陰の女子教育観 —
学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター客員研究員、NPO 法人　みずきの会　理事、ヒューマンライフケア非常勤講師　中島　広明
E-mail：tamago292000@yahoo.co.jp

小林美実の幼児教育論における「子どもの自己表現」の根源性
— 既存の幼児表現指導への批判と領域「表現」への期待 —
大阪府立大学　吉田　直哉
〒599-8531　堺市中区学園町1-1　大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類
E-mail：naoya_liberty@yahoo.co.jp

促通を目的とした介護予防運動プログラムの有効性
早稲田大学　非常勤講師　包國　友幸

日本福祉教育専門学校における留学生のやせと肥満
国立大学法人　富山大学名誉教授、学校法人 敬心学園
日本福祉教育専門学校校長　大谷　修
〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-16-3
E-mail：ohtani@nippku.ac.jp

社会福祉士及び介護福祉士国家試験における学習支援の検討
新潟医療福祉大学　松永　繁
〒950-3198　新潟県新潟市北区島見町1398番地
E-mail：matsunaga@nuhw.ac.jp

韓国における社会福祉士の養成と現況
日本福祉教育専門学校・敬心学園職業教育研究開発センター　客員研究員　高橋　明美
E-mail：akemi86@hotmail.co.jp